

生活科

丹 保 博
坂 井 文 代

1 生活科の本質について

私たちは、生活科の本質を次のようなものと考えている。

活動や体験を通して 自分の生活を自分なりに創りあげることが
できるようになること

私たちは、子ども一人一人が進んで環境とかかわり、具体的な活動や体験をすることによって、学ぶことの楽しさを体全体で感じ取り、満足感・成就感を得ることができると考えている。そして、そのことで、「次は～をしてみたい」という新たな意欲が生まれ、さらに、より積極的に環境とかかわろうとする姿が見られるようになり、自分の生活を自分なりに創りあげることができるようになると期待している。

つまり、生活科の本質とは、自分から進んで環境とかかわっていくような活動や体験を重ねていくことで、自分の生活を自分なりに創りあげることができるようになることと考えている。

2 本質にもとづく基礎・基本について

それでは、生活科で大切にしたい基礎・基本とは何だろうか。

私たちはそれを、知的な学習を系統的・体系的にすすめることとは考えていない。一般の人々が生活していく中で、必要感から、ものの構造や知識を得ることと同様に、自然や地域の人々との触れ合いを通して身近な問題をとらえ、それをより深く見つめ、その意味や価値を考え、自分なりに意味づけをし、生き方を身に付けていくことであると考え。そして、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせることも基礎・基本であると考え。

そこで、生活科における基礎・基本を次のようにまとめてみた。

自分の願いの実現に向けて 五感を通して対象にかかわり 自分なりの方法や工夫で
問題を乗り越えていこうとすること
また その解決のために必要な習慣や技能を身に付けること

3 自己の学びを広げ深めるについて

生活科における自己の学びを広げ深めていくこととは、自分なりの方法や工夫で問題を乗り越えていこうとすることを通して、自分なりの生き方を身に付けていくことである。とすると、自分なりの生き方を身に付けていくことを促す学びとはどうあればいいのだろうか。

私たちはこれまでの実践から、次のように考えた。

(1) 自分なりの「こだわり」が持てる場を保障する

低学年の子どもは、周りの環境と自分とが未分化である。自己中心的になりやすいということは、意欲的に活動に取り組みやすいともいえる。そこで、こだわりを生み出す場やこだわりを生かす場を設けることで自主的な働きかけを促していきたい。そのことで、子ども自身が五感を使って主体的に対象にかかわり、働きかけることができるようになる。そのことが、子どもたち一人一人の問題解決の力を育て、好奇心や探求心を生かすことにつながると考える。

(2) 活動の連続性を図り、意識の流れを大切にす

私たちは子どもの「～をしたい」「もっとやりたい」という意欲を引き出すとともに、その意欲を主体的に持続させる活動を展開していく必要があると考える。子どもの発想や気持ちにそった学習の流れの中で、活動に見通しが持てるようになり、活動を自分のこととしてとらえるようになる。つまり、活動の連続性を図り、子どもの意識の流れを大切にしていかなければならない。単元計画の段階から見通しを持って、しかも子どもの実態に応じて途中で変更可能な弾力的な単元を構想する必要がある。

(3) 振り返りのできる場を設定する

体験したことをそのまま終わらせてしまえば深まりのあるものにはならない。そこで、体験したことを、絵や文、動作などで表現させることが必要になる。振り返りの場を設定することで、その活動を自分なりに意味付けし、自分のとった行動を振り返ることになる。つまり、対象と関わっている自分自身が見えるようになる。子どもたちは、振り返りの場の設定によって、体験を振り返り、自分自身を振り返り、自分自身への気付きとなり、次の活動への見通しや意欲を持つようになる。

(4) 活動を通して生活上必要な習慣や技能を身につけさせる

自己の学びを広げ深めるためには、活動を通して生活上必要な習慣や技能を身に付けさせることが大切であると考え。基本的な習慣や技能が身につくことこそ、のびのびとした活動が展開できる。基本的な習慣や技能には、活動を通して身に付くものと、活動を進める上で身に付けておかなければならないものがある。これらを洗い出し、活動の中に位置付けることが大切であると考え。

以上、生活科の本質および本質に基づく基礎・基本、生活科における自己の学びを広げ深めるについて述べてきた。このことをさらに具体化したものは実践例「1年 ハーブだいすき！パートⅠ」の中で述べていきたい。

4 実践例 - 1年 -

(1) 単元名 ハーブだいすき！パートI

- (2) 目標
- ・自分なりの思いや願いをもって、育てたいハーブを選ぶことができる。
 - ・ハーブにはいろんな種類があることや、育てる、食べる、作るなどいろいろな楽しみ方があることに気付く。

(3) 指導にあたって

学習材について

ハーブは、最近ブームとなっている。書店ではハーブ関連の本が多く見られる。また、園芸店ではハーブコーナーが作られ、ガーデニングブームの中で注目されている。ハーブがブームとなる要因はいくつかあろうが、その栽培の容易さ、活用の多様性、薬用効果といったものがあげられるであろう。ハーブはもともと地中海辺りで栽培されていた香草の総称であるが、その意味を広くとらえれば、おなじみのヨモギやドクダミ、ショウブなども日本のハーブであろう。

本単元では、学習材としてハーブを取り上げた。子どもにとってハーブは次のようなよさがあると考えたからである。

- ・種類が豊富であり、目的によって子どもが選択できること
- ・育てやすく、長期間にわたって収穫できること
- ・食べる（ハーブティ、クッキー）、作る（リース、ポプリ、ハーブ染め）など、活動の広がり生まれること
- ・ハーブを栽培している人が身近におり（保護者）ハーブを通して身近な人々とのかかわりが可能であること

以上のことから、1学期から2学期にわたる単元『ハーブだいすきパートI』『ハーブだいすきパートII』を設定した。子どもたちにとって、ハーブや身近な草花とふれあったり、身近な人々とかかわったりすることは、これからの生活への期待感をふくらませ、生活を豊かにするエネルギーのもとになると考える。

本単元の基礎・基本について

本単元での基礎・基本は、次のように考えた。

- ・自分なりの思いや願いをもってハーブを育てようとする
- ・身近な人々とかかわること
- ・身近な草花やハーブとかかわること

1年生にとって生活科でかかわる対象は、学校や家を中心とした身近な人や自然である。入学以来、上級生や友達と遊んだり、草花で遊んだりとかかわっているもののその意識は弱いであろう。本単元は、学校の近くの公園を散歩して草花みつけをすることからスタートした。子どもたちはいろいろな草花を見つけてきた。そこで、みつけた草花のドクダミでお茶を作ったり飲んだり、ハーブ入りのクッキーを食べたりすることから、ハーブを育てる活動へと単元が展開していくように構成した。

身近な草花やハーブについて、本を見たり人に聞いたりして調べることで、自然への興味関心を広げていくであろう。この興味関心は、自分で草花みつけをしたり、ハーブを栽培したりする意欲につながるであろう。また、ハーブを通して、友達や家族、担任以外の先生など、人とかかわる喜びを味わわせたいと考える。

単元計画（総時数7時限）

主な活動と内容	学びを広げ深めるために
1 梅雨の散歩に行く ②	
・梅雨の草花みつけをしよう	
2 見つけた草花を調べる ③④	
・この花の名前を図鑑で調べよう	
・ドクダミはお茶になるんだよ 飲んでみたいな	
3 ドクダミ茶パーティをする ②④	
・お家の人を招待してパーティをしよう	
4 ハーブを調べる ①③④	
・どんなハーブがあるのかな	
・どんなことができるのかな	
・お家の人と一緒に調べよう	
5 なかよしになりたいハーブを見つけて ①	
・いろいろなハーブがあるんだね	
・私はこのハーブを育てたいな	
6 ハーブを植えて育てる ④	

学びを広げ深めるために

① 自分なりの「こだわり」をもって育てたいハーブを選ぶ

本單元における「こだわり」とは、ハーブに興味を持つこと、そしてハーブを育てる時に自分なりの思いや願いを持つことであるととらえている。子どもたちは、ハーブとかかわる中で「紫の花がかわいいな。」「ミントの匂いをかいだらうーっとするよ。育ててみたいな。」「カモマイルってお茶になるんだよ。どんな味がするのかな。」「という思いや願いを持つであろう。それが自分なりの「こだわり」につながると考える。そこで、ハーブに五感を通してかかわる場やハーブについて調べる場を設定する。

② 活動の連続性を図り、意識の流れを大切にする

本單元は、学校のまわりを散歩し草花見つけをすることから、ハーブの栽培活動へと発展していくように構成している。子どもたちは身近な草花の中に、食べたり、お茶にして飲んだりできるものがあることに気づき、興味を持つであろう。2学期單元『ハーブだいすきパートⅡ』では、ハーブで作る、食べるなどの楽しむ活動を行い、活動の連続性を図る。

③ 振り返りのできる場を設定する

散歩で見つけた草花を紹介しあったり、ハーブコーナーを作ったりして、活動を振り返る場を設定する。このような場を設定することで、体験を振り返ったり、次の活動への見通しが持てるようにしたい。

④ 活動を通して生活上必要な習慣や技能を身につけさせる

自分の思いを素直に表現したり、友達の考えを聞いたりすることは、人とかかわる時に大切な技能である。ハーブなどの草花について、本を見たり人に聞いたりして調べることは、自然への興味関心を広げたり深めたりすることにつながるであろう。

(4) 本單元における授業の実際と考察

主な活動と内容の実際

1 梅雨の散歩に行く

〈梅雨の草花見つけをしよう〉

- ・ドクダミ、ヒメジヨン、アレチノギク、パンジー、アジサイ、ネジバナ…たくさんあるよ
- ・見つけた草花を押し花にしよう

2 見つけた草花を調べる

〈この花はなんていう名前かな 本で調べてみよう〉



- ・わかったよ
- これはアレチノギクだ
- ・ドクダミってお茶になるんだよ 体にいいんだって
- どんな味がするのかな 飲んでみたいな

3 ドクダミ茶パーティをする

〈お母さんを招待してドクダミ茶パーティをしよう〉

☆おかあさんあのね、ドクダミ茶パーティをするんだよ。

ドクダミといってもどくじゃないよ。おちゃだよ。おいしいよ。ともだちもよぼうね。 K男

☆おかあさんあのね、あしたさんかんにきてね。ドクダミ茶パーティにきて、おはだをきれいにしよう。 F女

ここでは、前述した学びを広げ深めるための①～④を視点として、授業の実際について考察していく。単元の流れに沿って考察するため、②から順に考察していく。

②活動の連続性を図り、意識の流れを大切にする

子どもたちは、これまで生活科の学習として、校庭や学校のまわりを散歩している。本單元もおなじみの散歩学習からスタートした。この散歩学習では梅雨の草花見つけを行った。子どもたちはアジサイやネジバナ、ドクダミなどたくさんの草花を見つけてきた。それらの草花を調べていくうちに、ドクダミはお茶にして飲めることや体に良いことがわかり、ドクダミ茶パーティへと活動が発展していった。散歩学習は、子どもたちに草花への興味を抱かせ、草花の名前を調べる→ドクダミ茶パーティをする→ハーブについて調

- ・お母さん ドクダミ茶をどうぞ
- ・クッキーがあるよ おや？何か入っているよ ハーブだ

4 ハーブを調べる

〈お母さんと一緒に調べよう〉



- ・このハーブみたことあるよ ラベンダーだって！
- ・ハーブでどんなことができるのかな？
ハーブティ、料理、ポプリ、香水、お風呂に入れる、染物、薬…いろんなことができるんだね
- ・お母さんと一緒に調べたらハーブのことがたくさんわかったよ お母さんありがとう

☆昨日「明日の参観の時何をするの？」と聞きましたら「ひみつ」との答えでした。今日はすてきなパーティをありがとうございました。ハーブのクッキーをわざわざ朝焼いてきて下さった先生に唯々感謝です。子どもたちの発表も皆胸をはって1年生の自信にあふれておりました。親子でハーブの勉強もでき、今まで興味がなかったわが家も今日は食卓の話題になりました。 N女母

- ・ハーブって食べたり、作ったり、いろんなことができるんだね おもしろいな
- ・僕の家にもハーブがあるよ お母さんに言ったらくれるかもしれないよ お願いしてみようよ

☆おかあさんあのね、いえのハーブをがっこうにもっていてもいいですか。いいって言ってください。そしたらおいしいおちゃがのめます。 K男

5 ハーブの苗をもらう

- ・お母さん方からハーブの苗が届いたよ
- 〈なかよしになりたいハーブをみつけよう〉



- ・においをかいだらスーツとするよ
かわいい花だね
- ・私はこのハーブとなかよしになりたいな

べる→ハーブを育てるという活動へと発展していくきっかけとなった。低学年の子どもにとって散歩学習は、多様な活動の可能性を持つ有意義な学習であるといえよう。

子どもたちの意識の流れを大切にするために、教師が特に配慮したのは、ドクダミ茶パーティの場面である。ドクダミ茶にハーブ入りのクッキーを添えることによって、ドクダミからハーブへと子どもたちの興味関心を広げようと考えたのである。「このクッキーいい匂いがするよ。ハーブが入っている。」「うちにもハーブがあるよ。食べたことあるよ。」と、子どもたちの興味関心は、自然にハーブへと向けられていった。

③振り返りのできる場を設定する

散歩で見つけた草花を押し花にして教室の一角に掲示した。友達の作品を見て「僕の家にも近くにもあるよ。」とあって翌日摘んできてくれたり、「これはアレチノギクだよ。」とあって教えてくれたりする姿が見られた。また、ハーブについて調べたことを模造紙に貼って掲示したが、「ハーブで石けんも作れるんだって。」「私の家にもこのハーブあるんだよ。」と友達同士で情報交換する姿が見られた。このような場を設定することで、体験を振り返って情報交換し、次の活動へのきっかけとなる発言が生まれた。

④活動を通して生活上必要な習慣や技能を身につけさせる

本単元で身につけさせたいと考えた習慣や技能は、次の三つであった。

- ・草花について本で調べる
- ・お家の人を招待してドクダミ茶パーティを行う
- ・ハーブを通してお家の人とか

☆ハーブさんあのね、なんでミントさんがすきになったかっていうとね、それは、いいにおいがしたからなんだあ。とってもいいにおいがしたよ。 S男

☆ハーブさんあのね、きょうね、くらすのみんなとなかよしのハーブさんを決めたんだよ。わたしはこのレモンバームにきめたよ。どうしてかという、このまえ、このハーブでクッキーをつくったから、またたべたい！ K女

6 ハーブを植え、育てる

・なかよしのハーブを植えて育てる

☆ハーブのバジルさんあのね、ぼくたちにいいにおいがかがせてくれてありがとう。はやくさいてね。ちゃんとそだててあげるからね。いっぱいさいてね。きょうからみずをいっぱいあげるからね。 S男

かわる

「この花の名前、何ていうのかな。」「本で調べたらわかるんじゃないかな。」と図書室へ行き、草花の名前を図鑑で調べはじめた。最初、図鑑で調べるのはずいぶん抵抗があったが、季節ごとに分類してある子ども向けの図鑑を調べるうちに「夏のページにあるよ。葉っぱの形が似ているからこれだよ。」というような発言が聞かれるようになった。その後、図書室から草花の図鑑を借りて読んでいる子や、家の図鑑を持ってきて「ここにもドクダミのこと書いてあるよ。」と見せてくれる子が見られたことは、自然への興味関心を深めたことのあらわれであ

ろう。また、お家の人を招待してパーティを行ったり、ハーブをわけてほしいというお願いの手紙を書いたりして、お家の人とかかわることは、自分たちが学習の主体者だという自覚を芽生えさせたように思われる。

①自分なりの「こだわり」をもって育てたいハーブを選ぶ

本単元でのキーポイントは、ハーブという学習材が、子どもたちにとって適切なものであったかということである。子どもたちにとって適切なものであれば、自分なりの思いや願いをもって育てたいハーブを選ぶことができるであろう。ここでは、ハーブという学習材が適切なものであったかを考察する。

結論から言えば、一年二組の子どもたちにとっては適切であったといえるであろう。その理由は次に述べる三つである。

一つ目は、子どもたちにとって身近であったことである。半数近くの子どもの家庭でハーブが育てられていたようである。また、「ハーブがたくさんあったよ。先生におみやげ。」と家の近くの空き地にレモンバームがたくさんあるのを見つけてきた子や、お弁当の中にハーブを使ったおかずを入れてきた子、朝の会で「きのうハーブのスパゲティーを食べました。」と話す子などが見られた。教師が思う以上に子どもたちにとってハーブは身近であった。

二つ目は、子どもたちがそれなりの思いをもって、育てたいハーブを選ぶことができたことである。選ぶ際には、見る、触る、匂いをかぐ、味わうなど五感を通してかかわることができるように配慮した。また、教師がクイズや紙芝居などでハーブを紹介することで、子どもたちはハーブへの興味をふくらませたようであった。『いい匂いがするから』『クッキーが作れるから』『花がかわいいから』などその理由はさまざまであるが、一人一人がハーブとかかわり、自分の思いをもって選ぶことができた。

三つ目は、家の人からの協力が得られ、家の人・教師・子どものかかわりが深まったことである。ハーブの学習を家の人と一緒にいたり、ハーブの苗を分けてくれるようお願いする手紙を書いたりしたことで、お家の人からハーブに関する資料や苗、お手紙をいただくことができた。

今後の課題

今後の課題は、本単元で得たハーブへの思いや願いを、2学期の単元で実現する喜びを味わわせることである。そのためには、ハーブを育てる意欲が持続しなければならないし、ハーブについて調べたり準備したりすることも必要になってくるであろう。お家の人とかかわりを大切にしながら、子どもたちの活動を支えていきたいと考えている。